

【彙報】

◎ 二〇一六年度大会（二〇一六年七月二三日）

【研究報告】

高鳥 廉 「大徳寺の十刹化をめぐる諸問題―室町幕府禅宗官寺制度の再考に向けて―」

宮崎 聖明 「明代後期地方衙門における吏員人事制度の運用実態―遼寧省檔案館藏明代檔案を手がかりに―」

田村 理 「イングランドの自由」と奴隷制―書籍商 E・ラシントン(1756～1814年)のたたかいに即して―」

今泉 和也 「古典期マヤにおける「テオティワカンの影響」―三足円筒土器の分析を通して―」

【講 演】
三木聰先生記念講演（東洋史学講座・特任教授）
「雍正五年「抗租禁止条例」再考―戦後歴史学と現代歴史学とのはざままで―」

◎ 二〇一六年度総会（二〇一六年七月二三日）

総会にて北大史学会の委員・会計監査が以下の通り選出された。

【委 員】 高瀬克範・川口暁弘・谷本晃久・井上敬介・吉開将人・長谷川貴彦・権錫永・高鳥廉・南部玲生・鈴木山海・福井慶丈・今泉和也

【会計監査】 橋本雄

次に二〇一五年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認された。

I. 収入

前年度繰越金

二〇一五年度収入

（内訳）

会費

広告代（北大出版会）

抜刷代立替返却分

会誌販売代金

寄付

銀行口座利息

合計

II. 支出

（内訳）

『北大史学』五五号・『史筵』一三号出版費用

（印刷代〈含・抜刷代〉および振込手数料）四〇二、八九四円

郵送費（『北大史学』発送費用）二八、七二〇円

郵送費（大会・例会案内等）七、二六六円

事務費用（宛名ラベル）七四〇円

次年度繰越金

合計 一、〇一五、四三六円
一、四五五、〇五六円

◎ 月例研究会

(一) 二〇一五年九月一二日

井上 啓介 「書評・米山忠寛著『昭和立憲制の再建』(千倉書房、二〇一五)」

(二) 二〇一六年五月九日

村本 周三 「トビニタイ文化期の石器組成について」

高瀬 克範 「石錐の使用方法を解明する——千歳市キウス四・美々四遺跡の事例分析——」

◎ 二〇一五年度卒業論文・修士論文発表会

(二〇一六年二月二三日)

【卒業論文発表】

田渕 里奈 「紀元前四世紀の「サトラップ反乱」とアケメネス帝国」

木村 聡 「予算編成から見た海軍省・軍令部関係」

三浦 梨紗 「フランス革命と革命祭典(一七八九—一七九三)」

佐藤 加奈 「日本統治下台湾における教育政策構想——台湾総督府学務課長・持地六三郎を中心に——」

高橋 彩美 「三国呉の都城「武昌」と陸遜」

【修士論文発表】

高鳥 廉 「室町幕府の祈禱空間と護持僧——武家祈禱の史的展開と足利将軍家——」

富士 貴央 「古代イタリア農村部の聖域とローマ支配——サムニウムの事例を中心に——」

◎ 二〇一五年度博士論文・修士論文・学士論文題目

〈日本史〉

● 博士論文

大谷 伸治 「昭和戦前く戦後初期の〈国体〉と〈デモクラシー〉——日本国憲法との連続性に着目して——」

大和田 努 「日本中世外記官人の研究——廷臣の参集の場と人的ネットワークの形成を中心に——」

曹 建平 「近代満洲における煙草産業に関する研究」

張 集欽 「一九三〇—一九四〇年代中国河南地域における商人組織の研究」

● 修士論文

高取 廉 「室町幕府の祈禱空間と護持僧——武家祈禱の史的展開と足利将軍家——」

丁 竹君 「明朝における朝貢品の進貢プロセスについて」

山岸遼太郎 「源実朝政権の構造と対京政策」

● 学士論文

木村 友香 「兵糧から見る島原・天草一揆の籠城体制」

藤本 将晃 「大正期における軍部大臣文官制導入問題」

水野 聡允 「戦前・戦中期の南樺太」

渡邊健太郎 「高崎藩の運上政策をめぐる請負商人と銚子醤油商人の対立——十八世紀を中心に——」

市川 優太 「足利義材の諸国流浪」

伊東ゆう子 「日本古代の行幸と女性」

金石 瑞季 「室町幕府の関所政策」

木村 聡 「予算編成から見た海軍省・軍令部関係」

瀬尾 涼太 「後北条氏領国に見る戦国期禁制」

高尾 優太 「天保期江戸における「非人」・「無宿」間の身分的流

動」

藤井 もも 「日本人は原爆投下をどうとらえたか」

古屋紗也香 「昭和九年函館大火後の復興過程」

細江 隆史 「東条英機断罪論再審」

本多俊太郎 「足利義政期を中心とする同朋衆の研究」

宮木 俊樹 「昭和初期対ソ外交における日ソ不可侵条約問題」

〈東洋史〉

●博士論文

鷲尾 浩幸 「清末民初江南の地方自治と基層社会」

●学士論文

内山 壮 「シャー・ジャハーン治世末期の帝位継承争い」

小海 祈 「民国期雲南における自治意識の展開」

信太 混平 「穰侯魏冉に見る秦の封建制」

高橋 彩美 「三国呉の都城「武昌」と陸遜」

田渕 里奈 「紀元前4世紀の「サトラップ反乱」とアケメネス帝
国」

中野 貴文 「清代後期台湾の番割について——噶瑪蘭の呉沙を中心
に——」

三好 一眞 「アユッタヤー朝の王位継承から見た「一六八八年政
変」

渡辺 恭介 「サファヴィー朝に仕えたグルジア人ゴラーム」

〈西洋史〉

●修士論文

富士 貴央 「古代イタリア農村部の聖域とローマ支配——サムニウム
の事例を中心に——」

吉田光太郎 「三十年戦争後期におけるバイエルン選帝侯と西南ドイ
ツ帝国クライス」

海老原あすみ 「一九世紀ドイツ統一とハノーファー社会」

白浜 亜耶 「近世神聖ローマ帝国における財政」

●学士論文

平松 裕菜 「ビスマルクのイギリス外交政策について」

山本 浩之 「一八四八年革命と民衆運動」

折元 祐介 「祝祭を取り巻く政治——近代フランス第二帝政期の政
治文化」

治文化」

青木しずか 「古代ギリシアにおける女性と宗教」

河渕 悠希 「二〇世紀転換期バルカンにおけるネーション形成」

田畑 麻美 「一三〇—一四世紀のフィレンツェにおける白党と黒党の
対立について」

成田 冬真 「近世ケルン選帝侯領における魔女狩り」

深川 祐太 「コンスタンティヌスのキリスト教統一政策」

三浦 梨紗 「フランス革命と革命祭典（一七八九—一七九三）」

奥泉 結亜 「中世後期ドイツを放浪する人びと」

椿 美咲 「東ドイツにおける社会主義体制の崩壊——ライプツィヒ
の月曜デモに着目して——」

岩渕 康平 「帝政期ローマにおけるキリスト教の拡大をめぐる——
政治社会史的解釈——」

岸 百合子 「マクシミリアン一世時代における領邦ティロルの構
造」

庭田 沙綾 「一九世紀後半の南ドイツ諸国とドイツ帝国建設をめぐ
る諸問題」

松村陽佳里 「ミトリダテス戦争の文化的背景」

宗像のぞみ 「古代ローマの水道行政——鉛管の検討を中心に——」

〈歴史文化論〉

●博士論文

金 榮美 「植民地朝鮮における〈娯楽問題〉に関する研究」

井上 将文 「東郷実と帝国日本」

井上 淳生 「日本における社交ダンスの上演作品化に関する舞踊人類学的研究」

●学士論文（歴史学分野のみ）

鈴木 皓 「帝国日本の「内地延長主義」」

佐藤 加奈 「日本統治下台湾における教育政策構想——台湾総督府学務課長・持地六三郎を中心に——」

磯野 伸也 「現代アメリカにおける黒人射殺事件報道をめぐる一考察」

島 優樹 「永井柳太郎の朝鮮統治論」

薄井 沙織 「ジャン・ミシェル・バスキアと「黒人性」をめぐる一考察」

丸小 進平 「近代日本ムスリムの巡礼」

〈北方文化論〉

●修士論文（考古学分野のみ）

徳永 知久 「北海道出土古銭の研究」

●学士論文（考古学分野のみ）

勝木 麗華 「クワとスキに関する考古学的考察」

◎ 研究室便り

〈日本史〉

二〇一六年四月、井上敬助教を迎えることができた。修士課程から北大に学んで、博士の学位を取得して、かつての教え子が同僚となった。指導教員として感慨一入である。

日本史学講座は、相変わらずの大所帯である。教員六名、博士課程七名、修士課程十一名、学士課程五十七名、合計して七十五名である。休学者を除いてもこの人数である。ありがたいことである。

各ゼミごとに行事も盛んである。中世史ゼミでは、八月二十五日から二十七日にかけてサマーセミナーを引き受けた。北海道初の試みである。院生・学生たちにとつても、近年あらたな展開を見せる北方史研究の最前線に触れ、巡検やシンポジウムの進め方などを学び、全国の研究者と交流する、得難い機会になった。

近世史ゼミでは本年九月中旬に、博士課程院生の尽力により、初めて学部・院合同の夏合宿を行い、津軽半島を一巡した。

近代に関しては、置戸合宿が大団円を迎えた。九月二十三日～二十六日に日本史学講座、教育学部辻ゼミ、経済学部満園ゼミとの合同で行い二十八名が参加した。三年目となった戦後社会教育関係文書の目録作成は一六五一点すべて完了した。

今年の研修旅行は、九月五日～九日の日程で、広島・宮島・呉を訪問した。平和記念資料館や大和ミュージアムといった近現代史を代表する博物館を見学できた。集合、解散、宿泊場所が参加者ごとに異なるという前衛的な旅行計画に、世代の差を痛感せずにはいられない。(文責：川口)

〈東洋史〉

本年九月現在、東洋史学研究室は、教員三、専門研究員二、研究生一、大学院・博士課程二、修士課程一の計九名で構成されている。学部生については、二〇一五年度、研究室の教員を指導教員とする卒業論文が計八本提出された。現在、東洋史学研究室の教員を指導教員・担任とする学部生は、四年生六、三年生五、二年生八の計十九名である。

教員数が三名となったのは、三月末をもって、准教授の守川知子氏が東京大学大学院人文社会系研究科に転出したことによるものである。十年間の北大在職中に、研究室に与えて下さった多くの良き影響と、長年にわたる北大史学会への貢献に、心から感謝したい。年度末に十勝岳温泉で開催された定例の「追いコン」は、同僚・学生からの同氏に対する謝辞に溢れていたことを特記しておく。

以下、その他の近況をまとめる。特筆すべきこととして、長年院生として在籍した鷺尾浩幸氏が、博士論文『清末民初江南の地方自治と基層社会』を提出し、三月に課程博士の学位を取得したことがある。研究室修了生・関係者では、昨年度十月をもって、小林晃氏が熊本大学准教授に、また四月をもって、城地孝氏が同志社大学助教、亀谷学氏が弘前大学講師に採用された。加えて、四月には名誉教授の菊池俊彦氏が第二回北海道考古学会賞を受賞され、五月には長年のイブン・ハルドゥーン自伝邦訳の業績が評価されて、佐藤健太郎氏がチュニジアの文化団体からイブン・ハルドゥーン賞を授与された。外国人研究者が、外国史研究において現地研究者に認められるということは格別の価値がある。諸氏のご活躍をお喜び申し上げます。このほか、四月をもって、吉開が准教授から教授に昇任したことを付記しておく。

教員はそれぞれ各自の研究を進めている。退任前の最終年度にあ

たる三木聰氏は、守川知子編『移動と交流の近世アジア史』（北海道大学出版会）に「明清交替期の地方士大夫と旅——福建寧化県の李世熊を中心として——」を発表した。佐藤氏は「17世紀チュニジアのモリスコ」（神崎忠昭編『断絶と新生』慶應義塾大学出版会）などを発表した。吉開は、科研費（基盤研究C）「中国共産党と多民族史論」を獲得し、中華ナショナリズムと苗族ナショナリズムの関心から二十世紀中国民族史学史の研究に取り組んでいる。刊行業績としては、この一年は空白である。

なお、二〇一一年十二月には、北大東洋史談話会から『史朋』四八号が刊行された。院生主導の学術誌として全国の東洋史研究室に先駆けて発刊された『史朋』ではあるが、四月の談話会総会で、運営母体となる院生数の減少のため、残り二号を刊行した後はしばらく休刊することが、すでに議決されている。できる限り早い時期の復刊を目指したいが、本研究室が図らずも守川氏の転出、三木氏の退職を重ねて迎えることになったこの時期に、折悪しく北大は全国の旧帝大に先駆けて急進的な改革に着手した。その余波を受け、目下、本研究室は「藤井（教授）事件」（一九五〇〜六三年）以来の存亡の危機の中にある。若者の中でアジアの隣国に対する不人氣が一巡し、知的好奇心の高い学部生が集まりつつある中、何とか佐藤氏とともに苦境を脱したいと願い、日々奮闘中である。（文責…吉開）

〈西洋史〉

本年度の西洋史学講座の概況をお知らせいたします。現在、本講座は教員四名、専門研究員四名、博士後期課程学生三名、修士課程学生五名、学部学生三七名、計五三名によって構成されています。今年度も、博士後期課程学生一名、修士課程学生四名、学部学生一名の新しい仲間を迎えることができました。各メンバーの横溢な活動により、研究室は大きな賑わいを見せております。

教員の動向に関しては、山本文彦先生が研究科長に就任されました。大学をめぐる環境が激変するなかでの重責を担われ、多忙なる日々を過ごしております。また砂田徹先生が、半年間のサバティカル研修を終えられ、本年四月より校務に復帰されたことで、研究室に活気がよみがえりました。ならびに、本年は教員による著書の出版が相次ぎました。松嶋明男先生は、『図説ナポレオン—政治と戦争—フランスの独裁者が描いた軌跡』（河出書房新社、二〇一六年一月）を出版され、最新の研究に基づくナポレオン像を、読みやすい筆致で生き生きと描き出されました。長谷川貴彦先生は、『現代歴史学への展望—言語論的転回を超えて』（岩波書店、二〇一六年五月）を上梓なさいました。英米、および日本の現代歴史学の系譜を明快に整理し、「言語論的転回」以後への展望を述べられた意欲的な著作です。

加えて、本講座の動静として特筆すべきは、夏期集中講義として、今年の九月中旬に京都大学人文科学研究所より藤原辰史先生をお迎えしたことです。藤原先生はドイツ近現代史が専門ですが、時代・地域の枠を超えた講義内容により、教室には多くの学生が集まることとなりました。教師と学生との相互の対話に重きを置かれた講義は大変な好評を博し、盛況のうちに幕を閉じました。受講者の主体性を最大限に引き出す、活気に満ちたアクティブ・ラーニングを通

じて、歴史学を研究する意義について多大な示唆をいただきました。

（文責：長谷川）

〈歴史文化論〉

二〇一六年度の歴史文化論講座は、教員五名、博士後期課程五名、修士課程八名、専門研究員四名、共同研究員一名、研究生一名、学部生四〇名からなっている。教員の数はもともと八名体制だったことを考えれば寂しい限りだが、文学研究科の現状からすれば、五人体制のまま焦げ付いてしまった感があるのも、やむなしとせざるを得ない。それ以上の由々しき事態は、大学院生の総数の激減である。とくに、歴史系の優秀な大学院進学者の確保が大きな課題となっている。

明るい話題もある。まず、文化人類学の小田博志先生が教授に昇進されたことは講座の喜びである。「平和学」を打ち出し、学生たちの間でも人気のある小田先生の今後のご活躍を祈念したい。

韓国の光云大学の金光烈先生が客員研究員として来られた。一年間、日本陸軍の飛行場建設に関する研究を進められる予定である。ここ一年間で博士学位取得者は三人いた。韓国から留学生として来ていた金榮美さんは日本語の壁を乗り越えて、立派に学位を取得し、現在は韓国の国民大学校でポスドクをやっている。井上將文君は博士課程に進学して三年目で学位を取得した。快挙と言っているだろう。三年で学位を取得するには、かくあるべし、という見本を示してくれたと思う。しかし、おそらく多々課題も残していることだろう。課題をクリアして、一冊の本としてまとめられる日を楽しみに待ちたい。ほかに、文化人類学の井上淳生君も学位を取得し、専門研究員となった。以上の三人の今後のさらなるご成長とご活躍を期待したい。（文責：権）

〈北方文化論〉

二〇一五年度の北方文化論講座（考古学、文化人類学・博物館学、民族言語学）の構成メンバーは、教員四名、博士後期課程八名、修士課程六名、学部生一三名の、計三一名です。

考古学分野では、夏季の野外実習として第五回豊浦町礼文華遺跡発掘調査を実施しました（二〇一五年九月八日～九月二二日）。昨年までに確認されていた墓壇の本格的な発掘調査により、続縄文文化前半期の人骨や、それにとりまなう土器・石器をはじめとする副葬品が発見されるという大きな成果がありました。墓壇外の遺物包含層からは、この時期を特徴づける漁労具である「魚形石器」の祖型となる可能性がある資料も発見され、これからの研究が大いに期待されます。同遺跡では一般の方々を対象とした現地説明会や礼文華小学校児童の体験発掘を実施し、九月二一～二四日には北大の全学教育「フィールド体験プログラム」の一年生も受け入れました。実習の実施にあたり、今年も多大なご支援・ご協力をいただきました。豊浦町教育委員会・豊浦町郷土研究会の方々に、この場をお借りしてあつく御礼申し上げます。

研究室ではこのほか、毎年恒例の行事となっている土器製作実験を実施しています。また、噴火湾北岸縄文エコミュージアム構想の一環として、礼文華遺跡周辺でサテライト候補となりうる文化財や自然を検討する踏査（四月二九日～五月一日）も行いました。

教員の活動として、小杉教授は豊浦町秘境小幌フォーラム（九月一八日）で講演者・パネラーをつとめたほか、北大埋蔵文化財調査センターの運営や、札幌国際大学縄文世界遺産研究室への協力などに忙しい一年でした。また、高瀬准教授は、科研費のプロジェクトで日露米の調査チームを率いて北千島の占守島で発掘調査を行い、

目的としていた動物遺存体の回収に成功しています。今年の卒業・修了生は学部生・院生一名ずつと少なかったのですが、それぞれが地元での活躍を期して社会へと船出しました。今後の飛躍を期待します。（文責：高瀬）